

分科会報告(要旨)

第一分科会(教学部会)

座長 原 顕彰

運営 秋永智徳・片野博義

発題者 木村勝行

助言者 井藤太然

第一分科会は、二十名の参加者によって話し合われた。

まず発題者より、実証的な教学が学ばれているが、今は現代に対応即応する教学が要請されていて、妙法五字の弘通は、五義の今日状況を学習することになり、大衆の現代という実感をどうくみ上げ結びつけるかが、教化者の仕事と、教学の現代に関する発題があった。

それをうけて議長は、①現代に対応する教学か。②現代人にあつた教化学はいかにあるべきか。③教養として扱われる信仰に対し、教化者の信仰の感動という実感が必要ではないか。④教化センター作りの必要性。と協議

要点をまとめた。

討議された意見を整理すると、①教理の見直し。②専門用語・教学の現代語化。③諸問題に対応できる教学上の問答。④現代にふさわしい教化方法。⑤役立つ実用的教学・教化方法。⑥教師の資質向上。の六点到整理される。

発言された貴重な意見は、重層的に多種にわたるので、整理分類せずに発言された意見を順次要約して紹介する。

①現代の宗門の教学は、現代に対応できるのか否か

○他宗とまじわるうち、活動の基盤には、教学をバックボーンとすることを感ずる。

○教学は、教化者として内在し体験し、自己の咀嚼を入れて話す。

○教学の現代化の精進をしているのかどうかを、問わねばならぬ。

御遺文にもっと親しむべき必要を感じている。御題目をとえなければならぬ様に、させねばならぬ方法を考えるべき。

また、簡単に現代語訳することには疑問を感じる。

○バイブルは非常に平明な言葉で説教している。語っていることがらが、我々にわからぬということはない。現代の我々が使う言葉で聖書が語られ、教えが説かれるところに、現代人は引きつけられる。經典の漢文が、足かせとなつて、宗教的感動がゆきわたつていないのではないか。自分達の言葉で語る努力をしたい。

②平明さが現代人をひきつけるという意見に対しては

○宗教的言葉は、ことだま信仰・真言という考えがあり、平明に語ることのあいだに、乖離がある。積尊は、地方の言葉で布教せよと言われているので、その時代、その地方の言葉で語るべき。

○救いへの解決と指導は、教学以前に、自己の信仰的体験の深みが相手を説得させる力をもつ。信念に衆生がついてくる。

○信仰に拍車をかけるため、教学上の問題を明確に整理して、教えられるようにまとめてほしい。

○現代人を教化するには、自信をつける程に教学の研鑽が必要。

○經典の現代語訳は大事であるが、訳はどこまでも訳で、もとの經典を軽んじてはいけない。

③教学の現代化とは、平易にするだけのことでなく、信仰者の確立が必要ではないか

○教学の現代化は、現代へとひきずりおろすことではない。現代の諸問題を法華經と御遺文に問う姿勢が大事。

○教学が確立していない限り、具体的方策をうちたてても、流行風潮のものに流される。信仰の中に行を練磨し、教学を確立せよ。

○教学は、一般大衆世界に通用するものでなくてはならぬため、現代人の理解できる教学を作るべき。

○現代化というのは、皆がわかる教学を理論化したテキストが必要。現代人はそうとうな知識をもつもので、満足させなければならぬ。

○教師一人一人が、その場に即応しつつ、平易に咀嚼会通してゆくのが現代化。適切なパンフレット等を作るべき。

○自分自身の宗学があつてよい。それが現代化。

○個人の資質を問うているが、宗門が基本的な教学を解明されたものを、様々な階層に応じて出すべきである。

○教学の現代化とは、教化方法の現代化。

○ノウハウを書いたものが、現実として必要。

○現代の自分の言葉で語るときに、教学の現代化がされていく。教学の現代化は、平易なハウツー的なものが必要という意見は、不勉強のうらがえし。

○教学の現代化といっても、そこには教師が介在するので、教師の資質の向上がポイントになる。

○信仰を継承していくのは、女性の方が強いと感じる。教学の浸透は女性から。

○平易なテキストがあっても、そこには教師の会得会通が必要なので、教師の自覚と資質向上が必要。

○教学の現代化という言葉の意味がもうひとつ明確でなく、テーマの設定を考えてほしい。

○個人の資質としての働きと、集団としての働きと二分されるが、現代に通ずる教学を構成しなければ、世界に通じなくなる。法華経・御遺文を現代の言葉

で語る作業が必要。

以上、各種の意見が重層的に出され、教学の現代化は教化方法の現代化で、現代の人々の求めに対応・即応できているかが大事であるが、教学を伝える宗教者の資質が問われると語られた。
(片野博義)

第二分科会（寺檀部会）

第二分科会は、座長新井貫厚、運営井村大祐・大島啓禎各師のもと、熱心に話しあわれた。

まず、発題者の三原正資師の「法座を中心とした信行会活動の新しい展開について」話し合わせ、その話し合いの中で、助言者の岩堀豊種・植坂行雄両師の適切な助言もあり、参加者の真剣な話し合いがなされた。それを要約すると次のようになる。

最初に新井座長より「今回は単なる自己紹介だけでなく、先程の長谷川前所長の基調講演、また第二分科会のテーマを考慮の上、前むきの形をもって、各聖の御意見をお願いしたい」ということもあって、最初から有意義な意見が活発に討議された。

①寺院と檀信徒の交流、未信徒教化について

毎年の事ではあるが、統一信行・護法大会・各寺の信行会等開催しても、檀信徒側は老人の集まりでしかなく、発展性がない。若い世代を如何に寺に引き入れるか、という事が一番の問題点。

未信徒教化といっても、周囲が日蓮宗だけなので、いろいろ運営がむづかしい。又、過疎化が著しく布教伝道がきわめてむづかしい。

教師側の姿勢として、教師自身が浄佛国土建設等、口で唱えても理解していない。大寺は、葬儀・法事で布教伝道どころでなく、小寺は生活の維持が主で、それどころでない。要約すると、以上のような意見が各聖より出された。

②次に発題者の三原師の要旨

○法座を中心とした「お題目のつどい」で、信行会活動を活性化させることが目的である。

○布教師会によって各寺に向き、参加者(檀信徒)の質問に教師が応える在り方で、教師自身の役割を習熟し、より秀れた法座を行うことが出来る。

○法座を行うことにより、良き檀信徒の育成、又、未信徒教化の機会が得られる。つまり法座には家族ぐるみの参加も出来、必然的に活力ある若い世代の信行会づくりが出来る。

○法座の話題・人数については、テーマは特にしほらない方が良いと思う。最初から話を引き出すのでなく、自由に話し合せ、最後に信仰の意義にむすびつくようにする。女性が多い場合は、割合に共通の話題が多く(例えば、水子・流産・霊・家族問題等)、その共通の話題を通して信仰の道に入れる。法座の人数は一グループ十五人〜二十人位迄が良いのではないか。あまり多いと、いろいろのグループが出来て、話しがまとまらない。

○法座を中心とした信行会も個人では長続きしない。個人でやると、十回程度でマンネリ化してしまう。たまたま広島のように、布教師会という組織をもって行うので継続出来、又、新しい方法や考え方を導入出来、信行会活性化に役立つと思う。

○個人対教師間の相談の場合もある。

特に法座の場合は、多数の前で身の上相談は出来ない。特に新聞の折込みを利用して、個人的に相談を行っている教師もある。その場合に、その依頼者が、将来本当にお題目の信仰を保ってくれるかという事迄は疑問である。

以上が発題者の三原正資師の要旨、及びそれについて、各聖より討議された内容である。

③ 信行会について

尚、この寺檀部会、特に信行会については、数年前より討議検討を重ねられ、いいつくされている事であるが、大島啓禎運営委員（現宗研研究員）より「信行会の問題点」という資料を提示され、信行会会員の老令化・マンネリ化・主的制に欠ける等の資料のもとに、討議を重ねた。

○ 信行会のマンネリ化を防ぐには、他の信行会の会員と交流を行い、会員同志の自覚と、自分の所で行っていない方法や行事を取り入れて行うよう、新しい刺激を与えたらどうか。

人間が生きる本質、それに対して明確に人をゆさぶ

るような形がない。外側では、いろいろのテクニックを用いるが、内面を磨かなければ何もならない。それによって信行会の活性化につながると思う。

○ 個人で行うには限界がある。組寺単位とか布教師会等の組織の力を利用する。

各寺の信行会を、組寺単位で合同で身延の御草庵の前で、信行会を行っている。

或る若い副住職は、日程を組んで、各檀家に出向き、法座方式にて信行活動を行っている。その結果を寺報にて各種檀家に配布しているので、檀信徒同志の励みとなっている。

○ 今後「お題目総弘通運動」（信行会をとおして）を積極的に活動するには、信行会を理解し、実行し、発展させ、一カ寺一信行会を目指し、お題目の輪を広げる。これが理想であるが、いづれも時間をかけなければならぬ。

例え自分のところの信行会が、マンネリから脱皮出来なくとも、自分のまわり、または管内で少しでも発展したり、良い結果を得られれば、よいのでは

ないか。

院の行政サイドにまどわされずに、時間をかけ、一カ寺信行会作りをお手伝するよう心がけるべきである。

○信行会の重要性

新興宗教の場合は、御利益を得ると必ずその会に入会し、信仰の道に入ってしまう。本宗の場合は新しい信者さんが出来ても、将来、新興宗教のような力強い信念をもった信仰を持続させることが出来るだろうか。それには、各寺の信行会に入会させ、そこで信行生活を勉強させ、力強い信徒を育成する迄、行なうべきであると思われる。

○行政サイド(宗務院)と寺院との連繋は、もつとこまやかに。

宗務院より信行会結成の主旨は来ている。計画だけは毎年、先へ先へといつてしまう。その先の追跡調査は一切なされない。この辺をもつと把握してバラツキをなくすよう、行政サイドは指導するよう努力すべきである。

以上の様な要旨をもって、第二分科会「寺檀部会」を

閉会したが、最後の「宗務院と寺院との連繋は密に」という項は、寺檀部会の院への要望事項である事を附記する。
(井村大祐)

第三分科会(法器養成部会)

座長 太田鳳苑

助言者 菊池泰瑞

発題者 新聞智照

運営 岩永泰賢・鈴木浄元

参加者総数二十名

①基調講演についての意見交換

○講演における布教理念は尤もだが、それに基づく使命感を持って実践に移すことの困難さと、責任の重大さを痛感した。

○体系的な理論に感銘した。殊に、説得させるといふ手段を持って個人や社会を変容させる布教は、新宗教と対比して捉えると、実生活の中での切実かつ大きな問題である。しかも、これは一般教師の問題から、宗門としての取り組みに発展させなければなら

ない。

○布教と伝道の六つの条件を、我々教師が果して自覚しているのかという問題を認識することができ、自己批判の材料として捉えることができた。

②問題提起の理由(発題者)

信行道場訓育主任をはじめ、カリキュラム委員会など、法器養成の現場で実務に取り組んでいる立場から、教研の重要な問題として当初から取り上げてきた。殊に第十二回中央教研七百遠忌報恩身延大会宣言「一貫した僧風教育のカリキュラム作成実施、僧侶再教育の制度の整備、人材活用場の設置、地域における子弟教育の充実」を実現させるために、問題を提起した。

具体的には次の三つの問題を取り上げる。

①僧風教育

法器養成の原点である、寺院生活の中での師僧と弟子の一对一の教育と、学校・社会における一般教育との兼ね合いの問題と、世襲化に伴う厳しい僧風教育の欠如を補うための、宗門による教育機関の充実等の問題がある。これを踏まえて、自学自修を含ま

めての生涯にわたる法器養成を、(A)沙弥期(小中高生)、(B)教師資格取得期(大学・信行道場)、(C)能化教師期、の三期に分けて考える。

②教育論の充実と専門的教師の育成

真の僧風教育を追求し、「教育論」の徹底充実を図る必要がある。そのためにも、教師を育成する専門的な教師(指導者)の養成が急がれる。

③女性教師の育成

現代社会における女性の重要性を認識し、女性教師の育成を積極的に進める。そのために、寺族女性を育成し、活躍の場を与える。

③法器養成問題について

①僧風教育

①沙弥期(僧風林・沙弥校)

○開催時期が夏休みであるため、クラブ活動や修養道場と重なるので、活発な子弟の入場が困難かつ少ない。従って、各教区等で横の連絡を取り合い、開催時期を検討する。

○修養道場等と抱き合せて開催し、寺院子弟を道場

の指導的立場に育てることも必要である。

○檀信徒子弟も入場させる。(出家しなくても外護者になる可能性が大きい)

○教師としての意識や自覚、連帯感を持たせるため、子弟の全入の義務化、得度を済ませてからの入場も考えられる。

○信行道場とのプランクを埋めるため、中高生以上の青年沙弥校の設置が必要である。

○型にはまった管理教育をせず、寺院生活や地域社会の中での寺院子弟としての自覚が生じてからの入場が教育効果が大きい。

⑧教師資格取得期(大学・信行道場)

○信行道場は、僧風経験の無い人には期間が短い。

○宗教的な感激を与え、真の信仰を身につけさせる。法要儀式など、より厳しく内容を充実させる。

○身延山高校・大学には、学生の質の低下・女子入学の増加・山務生活との調和・寮生活・指導者不足などの多くの問題があり、解決のために、一貫教育を充実させ、僧風教育の理念を確立する。指

導者を公募して育成する。僧道実習生を増やし、

学生の山務への負担を軽減する。宗門における身延山の重要性を再考する。身延山を広く宗門外に解放する。などについて考えなければならない。

○優秀な子弟は宗外へ出る傾向にあるので、努めて僧籍へ入れる。

○師弟のコミュニケーションを増し、師弟共々に基礎的な学習を進め、その後には宗門機関へ入場する。学習のための宗門内外の人材による通信教育の発足などの方法論を検討する。

⑨能化教師期

○布教研修所は、徹底的な教学研究の機関としてはどうか。

○布教院は、入場回数に応じた段階的なカリキュラムを作成する必要がある。

○研修所・布教院共に、宗門全体の布教に対する熱意や意識の低下により、入場者が減少し資質を低下させている。研修理念・伝統を守る機構、カリキュラムが確立していない。内容・魅力・メリッ

ト(資格取得等)など全体的に中途半端である。宗務当局の予算編成、主任選定に対する安易さなど、現場と当局とのギャップ。教師を育てる教師を養成する機関ではないのか、終了生を宗門は有効に活用していない。

○信行道場・研修所・布教院・加行所など、総合一貫性のある研修が必要であり、そのためには、教育上の位置づけ・制度の整備・カリキュラムの作成などを急がねばならない。

○各本山に僧道は設置できないのか。

②教育論の充実と専門的教師の育成

○夏の僧風教育の組織化・体系化のために、優秀な人材によるプロジェクトを組む。

○他教団の機構を研究し、長所を積極的に取り入れる。

○中央の研修会の成果を地方で生かすために、各地に研修会を開催し、広く教師の意識を高める。

○住職特選制度などを研究し、教師の努力が認められ、反映される宗門作りを目指す。

③女性教師の育生

○寺院子女に、幼時より積極的な宗門教育をするために、女子僧風林を開設する。

○布教や寺院運営上、重要な立場にある寺院婦人の教師資格の取得と、宗門機関への積極的な入場・参加を勧める。

④まとめ

○発題者の体系的かつ具体的な問題提起により、中味の濃い討議がなされ、それぞれの教師が宗門全体の法器養成に大きな危機感を持ち、この問題に対し、真剣かつ急速な取り組みを望んでいる。

○殊に、寺院生活の中で、能化教師の姿勢・自覚を正し、信仰生活に基づく寺族のあり方を再考し、宗教的使命感を持った子弟・後継者・子女・寺庭婦人の育成に寺族を挙げて努力する。

○地域社会での幅広い人間形成を目指し、布教伝道者としての自覚を持たせるため、積極的に社会に同化させる。

○宗門のあり方を真剣に討議し、法器養成のための総

合一貫したカリキュラムの必要性を宗務当局へ具申する。

○絵に画いたモチにならないよう、実践に向けて全力を注ぐ。
(岩永泰賢)

第四分科会(世代別教化部会)

座長都龍張、助言者鎌田行学、発題者古河良皓、運営鈴木国守・植田観樹、参加者二十四名。

先ずお題目総弘通運動の中間報告を含めた青少年教化の現状報告から始まった。

次いで発題者から、(一)青少年教化活動の現状、(二)今後の課題についての発言、(三)事例報告がなされた。

その中で、①一カ寺単位の青少年向け教化活動の実施、②各地で行われる活動の資料・教材の提供や情報交換など相互協力の促進、③青少年向けの教材の作成・提供などが提起され、青少年教化は、今やその理念を議論する段階ではなく、実践の段階であるとの認識を深め、青少年に対してあらゆる手段を活用して仏縁を結んでいくべきである、との指摘がなされた。

以上の発題を受けて、各参加者から豊富な事例報告がなされ、その結果、次のような意見をまとめる事ができた。

一、組織(宗務所等)による各種講習会、又は研修会が各地区に於て効果が出てきているので、やがて地区から寺毎に出来るようにしてゆきたい。

二、青少年教化の効果は、直ちに出ることもあるが長い目で見て、成人した時にも体験の効果を認める事が大切である。特に小学生までは、案外やり易いが中学生になると学校生活の変化や家庭的にもむづかしい時期となり、今後の課題と思われる。

三、護法大会等に見られる各種の行事には限界があり、悪くいえば消化事業のようになって、終ってみたら何も残らないというのが実状のようである。しかし、中で特筆すべきものに、仏教会による仏教大学講座を開いたところ、数百名という動員数になったという報告があり、これを総弘通の面で応用できれば効果的である。又、青少年修養道場等々の催しも規模が大きくなるに従い、他宗の子供が増えて、かなり

通仏教的になり、御題目の総弘通から離れてしまうという逆の現象がでてしまう。

四、青少年教化は、青少年だけにとどまらず親子、できれば家庭的内容をもつ方法を見つけるべきであり、それが総弘通につながると思われる。

五、いずれにしても、啓蒙の時から実行の時期へとなるべきであり、その実動に向かつてのそれぞれの問題点の解決のためには、ぜひ横の連絡をとり合い、より効果的に、又、より多くの青少年との結縁の場を作っていくべきであろう。

六、以上のような青少年教化活動を確かなものにするには、リーダー養成が不可欠であり、早急な対策が必要とされる。又、そのリーダーを養成できるリーダーが欲しいといえる。そのために、将来的にも宗門内から外へ向けて、広く人材を求めなければならぬ。そこで、必要とされる人材バンクをはじめ各問題点解決のために、各地区教化センター及び中央の本部教化センターとの交流が大切である。

以上分科会の報告とするが、青少年に対する教化活動

は、まさにお題目総弘通運動にとつても宗徒の若返りをはかるべき必要不可欠な活動である。

そこで今後とも、各教師の置かれた状況に応じて、青少年との結縁をはかるべく各種の行事や活動に積極的に取り組む努力が求められるが、最後に分科会の討議を通して指摘された二・三の課題を記しておく。

まず、青少年の修養道場は、事例報告にも見られたように全国的に実施されており、寺院・宗務所・日青会単位と幅広く、しかも活発に取り組まれ、かなりの成果を上げている。しかしその反面、アフターケアが不十分であったり、年中行事として単発的な活動に終わりがちであるから、今後、定例の子供会や青年会活動のように、年間を通しての継続的な活動にまでつなげ、展開させていく努力が求められるところである。

次に、前述したようにリーダー養成の困難が指摘されており、リーダーとそれを指導すべき人材の養成・確保が課題である。

また、各世代別の教化のためのカリキュラムやテキストが望まれており、その作成にあたっては、宗門をはじめ

め多方面の取り組みが課題となっている。

そこで本分科会の要望事項としても、「世代別の各種テキストの作成」がうたわれた。
(鈴木国守)

第五分科会(教化伝道部会)

第五分科会は、座長豊田正通、助言者神谷行宏、発題者龍澤泰孝の各師によって進められた。

①中央教化センターについて

熱望する意見多し。早急に設立を要望する。出席者全員、それぞれ各地域に帰って拠点となることを確認する。

②要望事項

①僧侶(檀信徒)のやるべきこと、またやってはいけないこと(戒)について、法華経・御遺文等を使ってわかり易いものを作成する。

(例)新興宗教に入信することは……………

②新興宗教早見表(僧侶・檀信徒用)を作成する。例えば、何がどういけないとか。

③日蓮宗用コンピュータ用ソフト(索引的なもの)を

作成する。つまり資料のコンピュータ化ということ。

④教化センターで、大聖人の教えを必要に応じてサーブिसしてもらえるシステムが欲しい。

⑤視聴覚で法華経の教えを、体感できるような施設を、身延とか池上にも作って欲しい。例えば、その部屋に入ると法華経の素晴しさが身体に感じることができるとか。

⑥年一回位は、お題目総弘通運動を實踐している檀信徒と共に結集大会が必要である。

⑦統一されたわかり易い本尊観・行法・日常の心のあり方などについての印刷物をしっかり出して欲しい。

⑧宗門で、明るいイメージの仏教教会を作ったらどうか。例えば、土足で気軽に入っていられるような建物。また明るい雰囲気結婚式ができるとか。

⑨日蓮聖人の教えを、正当に深く研究・實踐している人々を、出来るだけ多く全国から掘り起こす。

⑩その方々を専門分野別に分けて、法華経の本義に即したうえで、現実社会での実践方法を確立して行く。

①地方・中央の教化センターにその実践方法の情報収

集システムと情報提供の能力とを備え、いつでも

我々教師の疑問（将来は信徒、未信徒の疑問にも答えて

行く）に、大聖人の立場から具体的な対処方法を引き

出し提供していく。

以上の要望があり、第五分科会の意志として確認した。

（渡部公容）

第六分科会（社会問題部会）

お題目総弘通運動と社会諸問題の接点をさぐり、運動

の展開方法を語りあおう。（医療・福祉・過疎・過密問題・

立正平和運動）

座長小川順道、発題者久住謙是、助言者近江幸正・石

田良正・参加者二十五名。

まず、長谷川正徳師の記念講演にそつて、新宗教・新

新宗教など、私達を取りまく現代の宗教の実状を、それ

ぞれ報告しあつた。

○若者の間では神秘・オカルトブームといわれている。

これらは若者に、宗教を宿命論的なものとして受け

とらせ、世の中を良くする・努力するという事を見
失なわせてしまふ。

○過疎地では田舎の風習が崩れ、そして都会風なもの

と同時に新宗教が入ってきた。

○過密な都市に出て、様々な問題や悩みを相談する所

がない。これらの人々に新宗教は、十分に対応して

いる。

○新宗教との対応には、毅然とした態度が必要だ。そ

のためには、こちらに十分な対策が必要である。現

実は、あいまいにしている点も多い。また、学ば

ねばならない事もある。

つぎに久住師の発題（会議資料）にそつて話しあわれた

内容を列記する。

①医療問題

○癌の告知を受けた人のショックや悩みを、誰が受け

とめるのか。患者には相談できる人が居るのかどう

かを、良く考えねばならない。

○本宗の僧侶で癌の告知を受け、自分の葬儀の準備を

し、遺言状も書いて立派に遷化した人が居る。この

様な死に方が出来るだろうか。また、末期者に対し坊さんが、どう答えられるか話しあっている。

○自分のことだけで生きている人は、死と聞くと絶望し、すべてが終りと考える。目的意識をもっている人は、死の告知を受けてもしつかりと、自己の死を考えて生きていけるものである。他宗では各方面から、これらの問題を研究している。本宗も生命倫理に対し、基本的な態度の確立が必要である。

○医師の立場では、最後まで延命策をとろうとする。しかし、医師の中にも過ぎた生命維持はしないという人もいる。

○基本的には、一日一秒でも命を延ばす事が大切である。同時に、人間の尊厳死も大切であり、その命に価値をもたせるのが宗教である。

○死は本人の問題だけではない。生かす側、看護する側の人々の意識も大切である。病人を世話する人の意識を高める教化活動をしなければならない。

○看護医学を、仏教の立場から考えていかねばならない。永遠の仏の世界に入っていく喜びなど、死に対

し光明を見いださせていかねばならない。病は医者にまかせ、病人の心は法華経と聖人の御遺文にむすびつけていく。病んでも喜んで病んでいく、新しい自己を確立させていく。これが仏教看護医学である。○喜んで死んでいく、苦しんで死んでいく。医者はこの答えを宗教に求めている。だが仏教側の発言はピントがずれている事が多い。

○聖人の生死観はどうか。「命と申す物は一身第一の珍宝也。」「不憎身命」など、どうとらえるか。

○脳死は本当に死か。生命倫理として生死観・生命観の確立が大切だ。医師の問題・行財政の問題とからみあわせて考えねばならない。

○自分の肉親に臓器移植が必要となった時、脳死の問題に反対できるであろうか。弱者の立場からも考えねばならない。

○お金がない人達の生命や肉体が、実験としてあつかわれている事実もある。

○これらの問題に宗門・宗務所ではどう取りくんでいけるか。寺庭婦人の協力は得られないか。今後、考

えていかねばならない。

○本宗の中にも、ホスピス活動をしようと話しあっている人もいる。私達はこれらの時代の要請に対し答えていかねばならない。

②福祉問題

○全般的に見て、本宗は福祉活動が弱いと思う。教団として組織化が進められず、全く個人の努力にまかしている。

○難民救済活動も宗内で盛り上らない。

○聖人の良観批判をそのまま受け取り、福祉活動は必要ないと考えているのであろうか。

○聖人は立正安国がない福祉活動を批判されたのである。宗門としてきちんとした福祉活動を組織しなければならぬ。

○寺を立派にするより、福祉活動に費用を使うべきである。個々の教師の活動を教団として、支えていかねばならない。

③過疎・過密問題

○過疎のため、寺院形態がなりたたなくなっている寺

も多い。このたびの等級問題では混乱したところもある。今後、宗門として統廃合も考えねばならない。

○後継者のいない寺も多く、寺へ来る嫁も少ない。悩みは深刻である。しかし、それなりに頑張っている。

○東京も土地の値上りなどで住民が追い出され、檀家も遠くなり、過疎化が進んでいる。

○過密地の寺では、求めてくる人に十分な対応ができず「田舎では丁寧にやってくれていたのに」と思わせるのが不憫であり、過疎地の寺を食っていると悩んでいる。

○自分の寺が食える・食えないの問題で、考えてはいけない。日本の産業構造・時代の問題として考えねばならない。

○日本の社会の変動・産業の空洞化に対し、受け身にとらえてはならない。積極的に受けとめ、十分に対応できる宗門を造らねばならない。たとへば、無住の寺を処分し、過密の所に布教所を作るという対応が必要である。本宗の財産を有効に使わねばならない。

○寺を中心に考えるから対応できなくなる。新宗教はそうではなく、若い世代・老人の中に入り、人の居る所には必ず入っていく。

○人口過密により、本宗寺院が対応しきれない所に、新興教団が増大している。過密の都市寺院と過疎地の寺院との連携活動を進めていかねばならない。

○子供会を中心として、都市寺院と農村との交流を進めている。農村の行政機関も協力してくれる。この様な流れを作りたい。

④立正平和運動

○京都は宗教法人の過密都市であり、その中で寺の存在意義を追求し、立正平和活動を、寺院中心に進めている。托鉢しながら様々な活動をしてきた。このたび二十年のまとめとして「いのちをえらびとる」という雑誌を発行した。

○立正平和の会には三七〇名の会員がいるが、本宗の日常活動としては定着していない。

○本宗は二十年間、千鳥ヶ淵で法要を行ってきたが、最近では低調になってきた。真宗教団は最近大きく参

加してきた。

○僧俗一体で誰でも取りくめる活動が必要である。今、こうして生きているのも平和であるがためである。

寺の法話の中で、平和の有難さを伝えるべきである。やる気があれば、どんな事でもできるのではないか。

たとへば〈寺の行事における平和祈願〉〈供養では戦争犠牲者の塔婆〉〈街頭では被爆者救援の托鉢〉〈門前では戦争の写真展を行う〉など。

○立正平和運動は、立正安国の祖意に立脚していると、いう事を明確にしていかなねばならない。本宗の活動は、各宗に先駆けている。

○宗務所が支部となっているので、もっと活発にやってみてほしい。

○過疎・過密問題と同じように、立正平和運動も、日本の政治・経済・産業の中でとらえていかねばならない。

最後に要望事項を確認し、すべてを終了した。

〈要望事項〉

一、立正平和運動の活性化を計るために、平和本部・支

部の活動を名実共に開始すること。

二、僧俗が一体となり、ふたたび被爆者をつくらないための立正平和行進を、日蓮宗として実施する方策を立てること。

三、核兵器廃絶は全人類の願いであり、とりわけ立正安国の祖願達成をめざす日蓮一門の願いであることを確認し、活動の具体策を講ずる。

四、一九八八年に開催される第三回国連軍縮特別総会に、メッセージを携えて、管長をはじめとする代表団が派遣できるように方策を講ずること。

右要望する。

(渡辺義伸)

第七分科会 (教化組織部会)

お題目総弘通運動の全国的・地域的連帯と地域の活性化について語りあおう。

座長 小倉光雄、助言者 井本学雄、発題者 伊藤立教、運営・記録 吉橋勝寛・嶋田堯嗣。

発題者から提言

長谷川前所長が基調講演の中で指摘された通り、組織

が弱いと宗教は滅びるという事実がある。我々が外に向って教化をする場合、教師間の連携が重要であり、組織の強化ということが必要となってくる。教化センターは、従来の教化組織・各種体制の有効な連動の機関として機能することにより、宗門が今取り組んでいるお題目総弘通運動の全国的・地域的連帯をはかり、地域の活性化に寄与するものである。地域教化研究会を地域教化活動の場とし、その日常活動の場として地域教化センターを位置づけ、地域教化センター設立を推進しよう。中央教化研究会は、全国教化活動会議の場とし、その日常活動と地域教化センター連絡のため、中央教化センター設立を推進しよう、との提言がなされた。

① これを受けて各地より集まりの出席者から、現況報告がなされた。

出席者十三名のうち、教化センターが完全に未組織の管区の方は五名であった。しかし組織化されているところでも、四管区合同のあるセンターは、人事が輪番のため、責任をもって仕事を全うしていない傾向との報告があった。

山口・島根は発足間もないが、使命感に燃えている様子であった。

千葉は、本年関東教研のブロックが、北関東と千葉に分割になったのをうけて、センターも別個に誕生した。

現在、そのあり方を模索中である。

近畿教区のセンターの歴史は古く、十三年を経ている。十二管区合同のため、当初は行政との関係で苦労もあつたらしいが、今は修養道場・僧風林等でも企画・立案し、所長会議で承認をうけ、実動に移している。

北海道（西）では、三年前に発足したが、教師の理解が足りず充分動けなかつたので、啓蒙に努めたい。日常の教化活動は、その所属のセンターで行うのが望ましい。同様の条件下にある北海道を一つにまとめたセンターを作りたい。また、教化上の情報交換のための仲介機関が必要である。必要な教材を送るなり、紹介して欲しいので、そのためにも中央教化センターは早く実現すべきとの提言があつた。

長野では、宗務所に四つの専門委員会を設けたが、そのうちの一つが教研委員会である。今年の中部教研の担

当が長野であるが、来年にはこれが、総弘通委員会へと衣替えすることになつてゐる。

名称こそセンターではないが、東京東部の電話相談室・東京南部の護法教化委員会は、教化センターと同様に機能すると思われる。

東京西部は発足して七、八年になる。初代の代表が現宗研に所属し、しかも宗務所の書記長という立場であつたため、所長にも理解を得易く、協議委員会でも即決であつたという。現在、教材の編集発行・教師研修会開催・檀信徒研修への取り組み等を行なつてゐる。

三重では、教化情報の発行・教師研修会・檀信徒研修会等を開催している。今後は未信徒に対し、青少年研修会を実施したいと考えているとの報告であつた。

② 中央教化センターについて

第七分科会としては、地方によって環境の違いがあるのだから、中央でもそのことを理解して欲しい。中央からの情報もものによつては、自分達なりに改良して廻している。こういう点も把握してもらいたいので、そのためにも中央教化センターを早く作つて欲しい。また「中

中央教化センターは、人材バンクネットワーク作りから始める」ことに對し、大いに賛同し早速管区に帰り管内全教師に配布してみたい。あるいは設立にあたり、地方の教区・管区に「早くセンターを作つて欲しい」と呼びかけたり、いろいろな意味での援助をしてゆく、という様な形で、地方のセンターが發展してゆくための、中央教化センターづくりを進めて欲しいとの意見、要望が出された。

③お題目総弘通運動について

①総弘通の大目標たる立教開宗会への積極的な取り組み。②教師自身の研修・研鑽の必要。③檀信徒教化のうち、青少年教化への取り組み。④布教の一つとして、唱題行脚の見直し。などが確認された。

最後に助言者から、単なる資料センターに止どまらず、人材その他教化に関する全国ネットが一日も早く広がるよう念願するとともに、それが「現代に生きる宗門の体制づくり」に一步踏み出すことになると結び、本分科会は終了した。

(嶋田堯嗣)